食・産直　文化的景観の活用

高知県中土佐町久礼（くれ）

■文化的景観は「まちの物語」

ここだけ戦略、自力戦略、リンカーン戦略、スタンプラリー戦略、想い出戦略、五感戦略の興味深い事例です。

リンカーン戦略は言うほど易しくはありません。全国各地で中心市街地や市場や観光施設などの「点」の活性化が話題になっていますが、関係者だけが盛り上がっても、関係ない住民の協力は得られないので、地域づくり・地域おこしには限界があります。逆にいえば、今まで地元の地域づくり・地域おこしに距離を置いてきた人たち、たとえば地元と関係ない企業の工場や、地元と関係ない国の出先や、商売と関係ない教育関係者などには、「商売の人や観光業の人のお金儲けに協力するのはいかがなものか」という論理が少なからずあります。お金儲けは手段であって、自分の人生の目的ではないのですから当然です。

彼らも積極的に協力したくなるような、地域関係者全員が一つになり、「面」の活性化につながる、地域おこし・地域づくりの共通の理念や誇りのような「共有価値」があると良いです。地域外からも応援してくれるようなものだともっと良いです。

そのまちの「風土」をまるごと使って、まちぐるみで、地域づくり・地域おこしする手法の例として、文化的景観の活用があります。文化的景観とは、文化度が高い景観という意味ではなく、産業やインフラなど、人によって作られた景観の意味で、自然景観の対比語です。

高知県中土佐町の久礼にある大正町市場は市民の台所としても観光スポットとしても賑わっていますが、そこだけ賑わっても意味がありません。市場を含む久礼地区のほぼ全域が「久礼の港と漁師町の景観」として、平成23年に重要文化的景観に選定されました。その中身と手法を紹介します。

■久礼の概要

中土佐町は人口八千人あまりの小さな町で、山間部は四万十川沿いの農林地です。久礼は町の中心地で、海沿いに立地しています。久礼の港の歴史は古く、平安時代の倉庫の遺構が発見されています。中世には四万十川流域から関西圏への大規模な商業活動の拠点となりました。また城下町として、城館、武家町、寺社、市を中心とした商人町、船大工などを中心とした職人町など、現在に続く町割りが形成されました。

戦前までは四万十川周辺で産する木材と炭の積み出し港として栄えました。戦後はカツオ漁が中核産業に発展しま

す。昭和47年頃に最盛期を迎え、漁港整備とともに市街地の拡大が行われました。漫画『土佐の一本釣り』の舞台となった場所です。漁師町の記録は16世紀の検地帳にあり、今でも家屋が密集する地区の中には、漁の安全を祈願する祠、干し魚、玄関脇の流しで魚をさばく人々などを見かけることができます。

久礼に残る建物は、これらの産業で栄えた歴史と文化の結晶で、水切り瓦や土佐漆喰など、厳しい風雨に耐える特色があります。土佐漆喰は、稲の藁を短く切断したスサを発酵させ石灰と混ぜ合わせたもので、耐水性が良く、室内の湿度調節の機能も持っています。

このように、「久礼の港と漁師町の景観」は、中近世に繁栄した港を核に漁師町や漁港などの市街地が発展して形成された文化的景観です。

■文化的景観の要素

近年、カツオ漁の減少とともに町がさびれつつありましたが、久礼の港を基盤とする伝統的な産業と文化を見直し、地域の個性を再発見して魅力を高めようとする動きが出てきました。こうした中、町が行った文化的景観保存調査を通じてその価値が明らかとなり、文化的景観保存計画に基づき保護の方針が固まりました。それを受けて国が重要文化的景観に選定し、保存・活用を図る動きが始まっています。

久礼地区の主な景観要素として、今なお現役の久礼内港と外港、土佐三大祭りの一つが行われる久礼八幡宮、観光客にも人気の大正町市場、林産物の交易が盛んだった往時を偲ばせる旧炭倉庫群および桟橋跡、漁師を守る恵

資料：中土佐町

比須神社、高知県内最古の酒造メーカー西岡酒造店のある本町商店街通り、林産物の積出港として栄え、土佐十景にも数えられる双名島を望む鎌田港などがあります。

久礼港は久礼川の河口付近にあり、内港と外港があります。久礼港区域には水産業や林業など人と自然とが長い期間関わって作られた景観が良く残っています。今でも人々の記憶には往時の鰹漁や木材や炭の積み出しの活気が残っており、コミュニティを重視した日常生活や行事として継承され、活性化の原動力となっています。

冬場の早朝には久礼川河口から久礼湾にかけて川霧、海霧の幻想的な風景が現れます。海岸からの太平洋・久礼湾・双名島の眺めは絶景で、それに港町独特の情緒的な音が加わり、日の出、ダルマ朝日、海霧、出漁などの印象的な風景の撮影地となっています。

久礼大正町市場は明治中頃の闇市が起源だそうで、大正時代の火事で建て替えたのでこの名前がつきました。平成15年には木造のアーケードに改装し、入り口の看板も市場内の雰囲気もなつかしい雰囲気があります。

ここには朝どれ昼どれの新鮮な魚介類や野菜などが並び、久礼の台所として機能しています。地元の人が買って帰るだけでなく、市場内の食堂にお店で買った品を持ち込んでその場で食べることができるので、観光客にも人気があります。ご飯とみそ汁を注文すれば豪華な自分流ランチができあがります。私は欲張ってカツオのたたきと刺身、タイ、ヒラメ、マナガツオ、イイダコ、カキをいただきました。

久礼内港

久礼外港

久礼大正町市場

久礼大正町市場の持ち込み食堂

久礼大正町市場周辺の街並と露天の店

付近には漁師町を象徴する建物が並び、軒先でカツオなどをさばいているおばあちゃんの姿など、昔懐かしい光景が残っています。

久礼八幡宮の秋季の祭礼は、土佐の三大祭りの一つにも数えられて賑わいます。神社の正面は鳥居越しにすぐ海です。

旧炭倉庫群と桟橋跡は、久礼が林産物の積出港として賑わっていた名残です。旧炭倉庫群はほとんど使われなくなり、かなり荒廃していますが、渋く味わいのある街並となっています。海岸には荒廃したコンクリートの桟橋跡が残っています。かつて役場付近に営林局の貯木場があり、貯木場から桟橋までトロッコ軌道で運ばれ、船で関西方面に

旧炭倉庫群・桟橋跡

久礼八幡宮

おばちゃんの食堂

積み出されました。今は静かな海岸で、ひとなつっこいノラネコがまとわりついてきます。

海岸近くの食堂は、のれん、おばちゃん、内装、若いカップル客、ソウルフードばかりのメニュー。まるでつげ義春のシーンです。おでんとトコロテンが美味でした。

本町商店街通りは、四国八十八か所霊場めぐりの遍路道でもあり、遍路宿もあります。かつては久礼の中心地でしたが、今は静かです。西岡酒造は天明元年創業、高知県で最古の酒蔵で、土佐漆喰、水切り瓦を多用した伝統的な建造物が特徴です。

■「文化的景観」の意義

小説や映画のような「まちの物語」は人々の心を動かすのでとても重要です。目先の観光資源だけでは物語は生まれず、地味ですが心が一つになる文化的景観の土壌が必要です。

没個性の街並は、久礼の逆を見ればわかります。各県の県庁所在地の駅前などは、区画整理され、建物も画一化されており、その割にはそれほど賑やかでも楽しくもなく、「これはどこの駅前だったかな？」の没個性状態です。そのような光景はあまり魅力がありません。

かといって「観光スポット」だけを売り込むのでは効率が悪いですし、住民と来訪者の「共有価値」が生まれません。大正町市場はグルメ志向の観光客に人気があります。同様に、港や海岸の風景は写真家に人気があり、酒蔵は日本酒好きに、遍路宿は遍路の人に、というように、それぞれ目的を持って久礼を訪問する人々を魅了しているのですが、単独ではその目的だけ満たせば終わりです。受け入れる側もそれぞれ別で、あまり連携がありません。

「文化的景観」は、地域の全員が、まち全体の歴史、産業、文化などの価値を総合的に発見し、保存修復していく手法です。住民にとってはまちの価値を認識して誇りを持ち、「まちの物語」に沿って新たに地域づくり・地域おこしを創り出す動機が生まれます。単独の目的で来訪する人には、そのまちに新たな興味と発見を与えてくれるきっかけとなります。言われてみるとあたりまえのことですが、各地の観光パンフレットは往々にして「観光スポット」だけを羅列して、そのまちを全体的に売り込むことにはあまり熱心ではありません。

もし久礼で重要文化的景観の活動がなかったら、総合的な地域づくり・地域おこしが難しく、それぞれの経済的事情と論理で、古い街並や倉庫群などが壊されたり、洋風の商業施設などに変身していたかもしれません。

久礼だけが特殊ではなく、日本各地にはそれぞれ立派な文化的価値がありますので、それを発掘してまとめあげれば、全国津々浦々が個性的で魅力ある土地に生まれ変わるのではないでしょうか。

西岡酒造付近